

author 天宮
Illustrator 鞠尾

R18
adult only

0.01

天宮短編集
collection of short stories

フォーエバー・エイティーン

天宮

amamiya

イラスト
鞠尾 様

表紙デザイン
猫鍋うどん 様

本作品はフィクションです。
作中に登場する名称・組織・業界等はすべて架空であり、
実在するものとは一切関係ありません。

転載・複製・複写・再配布
高校在学中含む十八歳以下の購入・閲覧
これらすべてを固く禁じます。

目次

フォーエバー・エイティーン

4

龍の鱗

83

フ
ォ
ー
エ
バ
ー
・
エ
イ
テ
ィ
ー
ン

退勤って、すごくいい言葉だ。思い浮かべるだけで気分が良くなる。好きな日本語ってなんだろうって考えた時、間違いなく上位に入る。ついでに、英語ならなんだろう、なんてどうでもいいことも連想してみたが、チップかなという結論に至った。チップって、ポテトとかチョコとかの後につくチップと同じなのかな。おれは学生時代、英語を含むほぼすべての教科で赤点を取っており、店の面接でも、身分証はパスポートじゃなかった。持っていないから。よって、簡単な綴りでもさっぱりわからない。

所詮暇つぶしの思考なので、深くは考えないし調べもしない。とそこで、タイミングよく電話が鳴った。壁にかけられた白い受話器へ腕を伸ばし、スリーコールで出る。すぐに出ると、なんだか帰りたがってる感がただ漏れで恥ずかしいので、せめてもの溜めである。

はい、はい、お疲れ様ですと、慣れた受け答えでつつがなく会話を終え

る。ガチャン、と受話器を置いたらいいよ、待ちに待った退勤の時間だ。あちこち濡れて乱れたシーツを引つ剥がして、使用済タオルとまとめ部屋の間放り、シャワーを浴びる。

おれの仕事場は三畳くらいの狭い個室で、部屋のほとんどをベッドが占めている。一応シーツはあるが布団はなく、マツサージベッドのようなレザー生地のマットレスが剥き出しでどんと横たわった、殺風景な部屋だ。

客商売だが、必要なのはおしゃれなインテリアではなくて、それなりに清潔で、大の男が二人寝転がつてくんずほぐれつするのに十分な広さがあること。そうして交わった後は、ベッドから降りて二歩で入れる、ネカフエみたいな小さなシャワールームで、汗やらナニやらを流して、帰る。シヤワーは客がいる時にも入るし、全部終わって退勤する前にも入る。この仕事を始めてからやけに体を洗うので、家ではすっかり風呂に入る頻度が

減った。楽なんだけど、なんだかなあ。

身支度を整えて部屋を出る。営業時間を過ぎ、どの部屋もすっかり静まり返っていた。雑居ビルのフロアに無理やり拵えられたような急すぎる階段を降りて、おれは一階にたどり着く。普段なら、客や他のキャストと出くわさないよう配慮される空間を自由に歩けるのは、閉店まで残って働いた者の特権だ。

暖簾の上があったバックヤードに顔を出せば、一人のスタッフがぐたびれた様子で座っていた。眉間に皺、はいつものことだが、眼鏡の奥の瞳は、目の前のディスプレイをひときわ険しく睨みつけている。おれに見向きもせず、手元でカチカチとマウスを鳴らす。煌々と光る画面の中で、表の色が白から赤に変わった。映っているのは明日のシフトに違いない。

「おつかれーっす」

おれが声をかけると、若槻、と書かれた胸の名札が、ようやくこちらを向いた。

「お疲れ。これ、今日の」

素っ気ないテノール。でも、静かな夜の店内には心地よく響く。彼がぶつきらぼうに差し出した封筒を受け取った。中を確認すれば、三枚の諭吉と二枚の英世が顔を覗かせた。本日のおれの労働、五時間分の対価である。

「問題ないす」

「ん」

続けて差し出された紙にサインをして返す。封筒を鞆にしまいかけたが、あ、と動きを止めた。おれは中から英世を一枚引っ張り出し、突き返す。

彼は、ぱさついた黒髪を揺らしておれを見上げた。真ん中から綺麗にぱっくり分かれた長めの前髪が、黒いフレームの縁を撫ぜる。その奥で、切れ

長の瞳が剣呑な光を宿していた。疲れもあつてかちよい不機嫌だ。けど、怯まない。

「今日、もう終わりつしよ？ 送つてつて」

にこ、と笑つて、できる限り甘つたるい声でおねだりしてみた。

「……お前なあ、送迎の申請は出勤時までつて決められてんだろが」

「じゃー店関係なく送つて？ それは和眞の財布に入れちゃつていいからさ。ふつーに帰るついでに車乗せてくれれば」

受け取つてもらえない英世を、ペラペラと風にそよがす。真面目な同僚で

スタツフ

あるところの彼が、そんなちよろまかしをしないことは百も承知で、おれは単にこいつにちよつかいを出したいだけだった。仕事のできる真面目な

わかつきかずま

同僚、若槻和眞。堅物だけとおもしろい男。

——おれの好きな男。

「あのなあ、そういう訳にはいかねえんだよ」

呆れて溜息をつきながら、それでも和眞は、行き場のない可哀想な英世を人差し指と中指で挟んで支えた。そしてもちろん自分の懐には入れず、さつきおれがサインをした紙に一言書き加える。送迎・マイナス千円とか、そういう類のことを。

別にまだ終電はあるし、その気になれば歩いてだって帰れなくはない。
(店から徒歩で帰ったことはないので、何時間かかるか知らないけれど)
見るからに神経質そうで、生真面目で、ルールを破るのは嫌いなくせに、おれのちよつとしたわがままなら押し切られて聞いてしまう、そんなお人好しな男。

あーかわいい。好き。

「次はないからな。今度は出勤したらずぐ言えよ、モモ」

眼鏡のフレームを押し上げ、渋々といった様子で和眞は言う。重たい声
音もものともせずにおれは、

「はい」

と軽やかに、かわいらしく返事をした。

おれの名前はモモという。職場で呼ばれるには随分と可愛らしい名前だが、もちろん本名ではない、源氏名だ。本名は昴。よだすぼる依田昴。

おれが働いているのはいわゆるゲイ風俗と呼ばれる店で、形態は大きく二種類に分けられる。客の家やホテルに出向くタイプと、客が店に来るタイプ。おれの仕事は後者で、出勤したキャストには一人一部屋個室があてがわれる。前者がデリバリーと呼ばれるのに対し、こちらは箱と呼ばれた

りする。こういう店は概ね雑居ビルに店を構えているが、フロア内に並ぶ部屋はどれも非常に狭く、窓のない閉じた空間だ。カラオケボックスなんかに近い。だから箱、なんだと思う。むべなるかな。さもありなん。ちなみに国語はギリ赤点じゃなかった。

なんでこんな仕事してるの？

これは仕事中間かれる質問ナンバーワン。いやそれ、客として来てるそつちが言う？

「え〜？ エロいこと、好きだから。〇〇さんとするのはあ、特にきもちから、好き」

接客方法は人それぞれだが、おれは良客に対してはこんな感じで返す。

ニコニコして、時間ギリギリまで腕を絡ませて、キスして、離れたくないですアピールをしまくる。

一方、二度と来て欲しくないクソ客に対しては、こう。

「いやー、母親が変な宗教ハマっちゃって壺買わされて借金エグくてー。これが一番手っ取り早く日払いで稼げる仕事なんで。おれ的には肉体労働とかホストとかより全然向いてるんすよねー」

こう言えば、大抵相手の顔は引き攣る。この世に星の数ほどある仕事の中で、わざわざ身体売ることを選んでいるわけだから、それなりの理由があつて然るべきだろ、とおれは思うが、そういう現実から目を逸らしてイイ思っただけしたい、それがお客様なのだ。勝手なもんだぜ。

プレイ中横柄だつたり乱暴だつたり、あとは話していてなんとなくやりにくくなつて相手にはこれで行く。すると、よつほど空気読めない奴以外はほぼ来なくなる。より仕事がやりやすくなる。

しかしながら、こういう客を選ぶような真似ができるのは、おれが十八

歳だからである。風俗界の最年少、ピチピチの十八歳は、夜の世界じゃ最も儲かる黄金期だ。

当然、実際の年齢は違って、本当は二十一。この業界では名前も年齢もいくらか誤魔化していいし、なんなら顔だって隠してもいい。普通の世界とは全く異なる常識で回る世界。それが、昼の仕事からあぶれたおれには心地よくもあり、いやでもやつぱ変だろと思うこともあり。

例えば、このサバ読んだ三歳になんか意味あんのかなーとか。

だって、あくまでおれの体感でしかないけれど、十八の時のおれと今のおれは、見た目も中身もほとんど変わっていない、はずだ。十代と二十代には差があると言われるればそれはそうかもしれないが、単なる数字とか、法律の話であって。現実の肉体や精神には即してない。

若い方がより価値が高いっていうのはなんなんだろう。女の子は特にそ

う言われがちだと思うが、男だって同じだということを、おれはこの業界に入ってはじめて知った。若い子とエッチしたいっていうのは、人類共通の欲望なのだろうか。動物的本能？ 誰しも皆平等に歳を取るのに。歳を取るからこそか。こういうところに来る人間は皆、現実に無いものを求めている。

ランドと一緒にだよ。面接の時、店長はそう言った。着ぐるみ越しじゃないし、衣装はドンキだけだね、夢を見せるのがきみたちの仕事なの。とくたびれた笑顔で禿げたおっさんが言うのと、なんだかものすごい説得力があった。含蓄がありそうな感じ。

別に、その言葉にいたく感動したから入店を決めた、というわけではないが、明らかにヤバそうな雰囲気のおっさんや、調子のいいことしか言わないおっさんに丸め込まれるより、いくらか信用できそうな匂いがしたか

ら、ここに決めた。店名がキシヨすぎないのもよかった。これから自分は、その店所属の源氏名くんになるわけだから、『あからさまでもなく下品な店名』のモモを名乗るのは勇気が要る。

勤めて十ヶ月。おれはこの店でキャストとして働き、知らないおっさんとくつついたりくつつかれたりしゃぶったりしゃぶられたりして、真つ当な職業と比べて圧倒的タイパでそれなりの金を稼ぎ、そしてついでに。

無愛想なスタッフの一人に恋をしてしまったのだった。

明かりの落ちた雑居ビルから、道路を挟んで斜め向かいのパーキングへ。鍵が開くと、おれたちは運転席と後部座席へ同時に乗り込む。扉を閉めた途端、おれの中の仕事モードは完全にオフになる。まるで自分の車かのよ

うにだらりとくつろぎ、和眞はそんなおれを無視して、黙ってエンジンをかけた。

「いつも通り、アパートの前でいいな？」

さながらタクシーの運転手のような事務的な問いに、おれはヤジを飛ばして絡む。

「えー腹減らない？ どっか食いに行こうよ」

「今から入れる店なんてないだろ」

「ラーメン屋ならやってるでしょ」

「太るからやめろ」

うーん。本当に素っ気ない。でもこれが、和眞の通常運転なのだ。仕事とプライベートの間くらいの距離感で送ってくれるようになっただけ、おれは善戦している。これはもうちょい踏み込めるだろうと、何度か飯には

誘ってみているのだが、そちらは今のところ全敗している。

おれは助手席の黒いヘッドレストの裏に額を擦りつけながら不貞腐れた。「もう仕事終わったんだからさあ、あんまガミガミ言わないでよ。体型管理もスタッフの仕事とかさ、和真言いそー。はい、先に釘刺しときました」

「働いた割に元気有り余ってんな。さっさと送ってやるから家で勝手に好きなもん食え」

「えー」

ぐん、と車が走り出した。おれは反動で仰け反り、そのまま座席の背に凭れた。

「じゃーできるだけ遠回りしてー」

「ガソリンの無駄だろ」

「もつれないなあ。毎日職場と家との行き来だけじゃ、つまらないでしょ？」

「そうだとして、なんでお前と出かけなきゃなんないんだ」

「じゃあ他に誰か出かける相手いんの？」

「……関係ないだろ」

「じゃーおれとちよつと寄り道したっていいじゃん」

「うるせえぞ」

少しずつ和眞の声がささくれ立っていくのがわかる。こういうのをうざ絡みって言うんだろうなと思いつつも、やめられない。

箱の中で待機していると退屈なのだ。今日はマシンだが、稀に予約がない日なんかは特に。

客商売なので、客が来れば否が応でも話さざるを得ない。かと言って、

こちらの好きな話ができる訳じゃない。相手の好きなようにさせてあげるのがこの仕事。

それに、箱の中は息が詰まる。夜職専門の求人サイトでも、勤務時間は自分で選べるという自由さはよく売りにされているが、うちの店は個室を割り当てる関係上、他のキャストとの兼ね合いで、そこまでシフトの自由度は高くない。おれは、平日休日問わず陽が落ちる頃から閉店までの五、六時間くらいをメインに出勤していて、たったそれっぽっちの時間でも、逃げ場のない部屋の中にいるとげんなりしてしまうのだ。

ようやく外に出られて、モモでありつつも、そうでなくてもいいラフな時間が訪れて、気兼ねなく会話ができる喜びが止まらない。ましてや相手は好きな男だし。なおかつ和真相手なら、仕事の愚痴も言えてしまう。

けれど今夜は——これ以上うざ絡みをする、機嫌を損ねてしまいそう

だ。おれはおとなしく黙って窓の外を見た。好きだからちよつかいは出したいが、嫌われたくはない。

景色が流れていく。和眞の運転は性格が出ていて、静かで堅実だ。目を瞑れば眠ってしまいそうになる。しばらく心地いい沈黙が続き、ややあつてから和眞が口を開く。

「いつ辞めるんだ」

「えっ」

おれは落ちかけていた臉をぱちりと開いた。

「そろそろ目標額いってもおかしくないだろ」

鞆の中の封筒を思い浮かべる。目標というのは、ここに入る時に店長に訊かれて適当にでっちあげた額である。正直いくらと答えたかも覚えていない。

「んー、まあ……年内には？」

何も考えていなさそうな雑な返答にも、和眞は深く突っ込んでこない。

自分から聞いてきたくせに、興味の無さそうな平坦な声で、短く、

「そうか」

とだけ言った。おれは口をへの字に曲げた。

こういう仕事は、だから長く続けるものではないとされているようで、店もそれを推奨しない。おれが今、大した努力もせずにとただ出勤しているだけでぼちぼち稼げる現実があるように、年を重ねれば重ねるほど難しくなるのがリアル、らしい。悪い店は何も言わず、キャストを働かせるだけ働かせて、稼げなくなったらポイというのも珍しくはないが、うちの店にはそういう気はないようだ。現に、目標金額をスタッフにまで共有している。単に和眞が真面目すぎるだけかもしれないが。

お仕事で聞いてんのかなあ。

おれの今後を案じていると捉えられなくもない。恋をしていると、いいように解釈してしまいたくなるのが人の性だ。

和眞は再び運転に徹している。そっちから踏み込んできたくせに、それほど興味ないみたいいな素っ気なさ。このギャップにくらつとする。物足りなくなる。平坦な言葉のもう少し先が欲しくて、おれはついさつきやめよう。と決めたらうざ絡みを再開する。

「いいのー？ おれが辞めちやっても」

「自惚れんな。ナンバー3くらい、いくらでも代わりがいる」

「や、店の心配なんかしてないし。そうじゃなくて」

よいしよと姿勢を正して、それから運転席のヘッドレストに顔を寄せる。

「やめちやったらさあ、和眞と接点無くなるじゃん」

「それはそうだな」

「おれないと店で話す人なくてさびしいっしょ？」

和眞は呆れていた。よくする顔だ。おれがそうさせているとも言える。

でも、呆れててもかっこいいから、なんか癖になつておれがいる。

「仕事に来てるんだぞ。喋りに来てるんじゃない」

「の割に、おれに構ってくれるじゃん」

「……ここで降ろすか？」

外を見れば、辺りは何もない真つ暗闇の住宅街だった。コンビニすら見当たらない。幸い今は夜道に放り出されても命の危険はない季節だが、深夜の迷子は御免だった。おれは慌てて、

「冗談じゃ〜ん！」

とからから笑ってみせた。はあ、と和眞の溜息が聞こえた。

ウィンカーが点滅する。ゆるやかに右折。和眞の車に預けた体が無防備に傾く。

「いやでも実際、和眞がおれに構ってくれるの、なんで？」

「……またするのかその話」

おれが目下気になっていること。度々、それとなく聞いては躲されていること。

おれは、和眞にまだ告白していない。完全なる片思いなのだ。こういう店で、キャストとスタッフとして出会ってしまっているから、迂闊に進展できないという事情もある。じゃあこういう出会い方じゃなかったら、進展できると思ってるの？ という話だが、完全な脈ナシとも思えないんだよなあ。和眞はおれに甘い。なんだかんだで相手をしてくれる。その訳が知りたい。ただ仲のいい同僚、あるいはよく見積もって友達的な感じで、

仲良くしてくれているだけかもしれないけれど。

「ねね、どして？」

——知りたい。さして深刻には聞こえないよう声はかわいいこぶつて、けれどできれば聞き出したので、ある程度の真剣さを滲ませる。さつきみたいに脅されても絶対降りないぞという意思表示で、ひしつと運転席のシートにまでしがみついた。ルームミラーに映ったおれの腕をちらりと見やり、和真はアホかと呟いた。

「スタツフとして、キャストを管理してるだけだ」

「へーえ」

いつも通りの温度でかわされてしまった。ええい、もう一步。

「堅物のくせして色恋管理とか、やるう」

眉間にきゅつと皺が刻まれた。渋い顔。でも拒絶のような強い拒否感は

ない。そういうのを察するのは得意だ。伊達に一对一の客商売やってない。でも、だから期待しちゃうんだよな。

おれが和真に恋をしていること、わかってて、適当に泳がされているよ
うな感じ。

「俺が言ってるのはそういうのじゃない」

「じゃあどうなの？」

「純粹にお前を管理してる。牧場の家畜みたいなもんだ」

「か、家畜で。例えばひどい」

「俺が本当にひどい奴なら、ルール破ったキャストを家まで送り届けたり
しないだろうな」

言われて頷いた。それはそうだ。そしておれは、和真のそういうところが好きなのだ。

これは今夜も聞き出せまい。早くもおれは、心の中で白旗をあげる。まだだらしくシートに体を沈め、物思いに耽った。

いつから好きになったんだっけ。

キャストとスタッフは、主に出勤時と、精算の時に顔を合わせるくらいだ。入店して何度か働くうちに、常駐しているスタッフがわかるようになって、まず顔がいいなって思っ、なんとなく年が近そうに見えたから話してみたら意外と面白くて、クソ客の相手した後でも若槻さんの顔見たら元気出るなあとか、そういう風に。

じわっと好きになっていた。でも恋ってそういうものだと思う。顔を合わせて、話をして、何気ない時間を重ねていくうちにいつの間にか芽生えている。今だっ、てそう。

車がゆるやかに減速する。正面には赤い光がぼうつと浮かんでいる。気

付けば、辺りは見知った近所の景色になっていた。もうじき家についてしまふ。

もうちよつと一緒にいたい。でもおれの手には、理由になる手札が一枚もない。

「和眞」

「なんだ」

返事はあつたが、こちらを向きもしない。運転中だから当然だけど、それがさらにさみしさに拍車をかける。センチメンタル。

「……おれが店辞めて、十八歳じゃなくなつても、家まで送つて」

我ながらかなり意味不明なことを言ってしまった。和眞も怪訝そうに答えた。

「なんだそれ。そもそもお前、十八じゃないだろ」

「今はまだ十八だよ」

答えはないまま、信号が青に変わった。車は一瞬、荒くぐらついで、その後ゆつくりと前進した。不快にならない程度の運転の乱れに、おれは何かを見出してもいいんだらうか。

現状、おれと和眞の關係は同僚でしかない。辞めれば、そこで切れてもおかしくない縁だ。それがさみしい。

会話が途切れる。おれは恋愛が好きだし、駆け引きとかしたがるけれどその割にはうまくない。湿っぽくなりすぎたかな。今更だけど、適当なこと言っておセンチな空気をごまかしてみる。

「……さっきのおれの台詞さあ、そういう歌みたいじゃない？ 昔の」

ふふふふん、と鼻歌でサビを刻んでみる。派手な水着は別に今でも無理だけどなー、とひとり笑う。無視されるかと思いきや、和眞はそつちか、

とぼつりと漏らした。

「え？」

「……モモはまだ十八だから、つてことかと」

「ん？ ……あー、なるほど。そつちか」

歌う気もない乾いた声でも、ちゃんとおれの話に乗ってくれる。そういうところ。そういうところが好き。心臓がぎゅぐゅつてなる。

「もう着くぞ」

「うん」

目の前に迫る突き当りを左に曲がれば、そこはもうおれの住むアパートだった。

本当は、ずっとこのまま乗っていたいのに。

人には言えないような仕事の、日付も変わった真夜中の帰宅。この状況

だけ聞けば、うらやましがられるような要素はこれっぽっちもない。むしろ、体なんか売って可哀想だとか、若さを浪費して勿体ないだとか、将来どうすんのか、いろんな正論を浴びせられるのだろう。

でも、おれは正直、これまでの人生の中で今がいちばん、心地いい。

——ここなら誰もおれを遠ざけないから。

キモいけど、おれを求めてくる人とひっきりなしに出会えて、愛想よく笑ってキスしてエロいことするだけで生きてける分の金が貰えて、しかもおれには仕事頑張るモチベになる大好きな男がいて、これって相当恵まれてる。

一瞬、昔のことが頭に過つてきゅつと喉が締まる。記憶が溢れ出してくる前に思考を遮断した。前で運転する和真の姿を目に焼きつける。車のスピードが落ちていくのと同時に、心が穏やかになっていく。

できることなら一生、このままがいい。明るい光は浴びられなくても、あの頃よりはずっと、息がしやすい。